

## 作型別イタリアンライグラスの品種比較

田村紘吉・畠山澄雄・十川幸一

(宮崎県総合農業試験場)

イタリアンライグラスは数多くの品種が育成され、市販されているが、それら品種の利用目的別及び作付利用期間別の使用分類については究明されていない点があるので、今回は作付利用期間別の適品種の選定を農林登録品種について検討したので、その概要を報告する。

### 試験方法

1. 供試品種 ミナミワセ (MW), ワセアオバ (WA) ワセユタカ (WY), ヒタチアオバ (HA), ヤマアオバ (YA), ナスヒカリ (NA)。
2. 播種法 播種量 200g/a の散播。
3. 播種期 昭和50年10月20日, 51年10月24日
4. 施肥量 (kg/a) 基肥 N:1.0, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:1.5, K<sub>2</sub>O:1.0, 厩肥:150, 苦土石灰:15, 追肥 N:1.0, K<sub>2</sub>O:1.0 を刈取毎に施用。
5. 作付利用期間 第1表に示す3作型で検討した。

第1表 作付利用期間

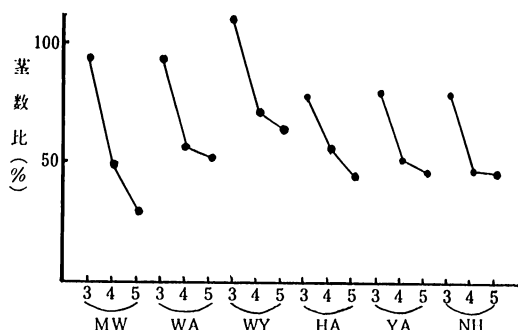
作型		月								
		10	11	12	1	2	3	4	5	6
1型	50年	●	—	×	—	×	—	×	—	×
	51	●	—	×	—	×	—	×	—	×
2型	50	●	×	—	—	×	×	×	×	×
	51	●	×	—	—	×	—	×	—	×
3型	50	●	—	×	—	×	×	×	×	×
	51	●	×	—	—	×	—	×	—	×

●— 播種期 ×— 刈取期

### 結果および考察

1. 草丈の伸長はワセユタカが最もよく、各作型において最高の合計伸長量であった。極早生のミナミワセは各作型とも最低で、特に2, 3型の伸長が小さく、4月以後生育が著しく低下した。

2. 茎数は全品種とも2番刈時が多く、その後刈取回数が進むに従って低下した。その低下は早生系が晩生系より小さく、品種間ではワセユタカ, ワセアオバ, 晩生系の順に小さく、晩生系の3品種はほぼ同様な茎数推移であった。ミナミワセは3番刈時(3月)まではワセユタカについて多い再生茎数であったが、その後著しく低下し、4月刈取後の再生茎率は30%で他品種より約20%



第1図 2番刈り茎数に対する3~5番刈時茎数割合

低かった。

3. 風乾収量の最多品種は作1型では1~3月間の収量が多収であったミナミワセ, 作2型では4月の生産量の多いヒタチアオバ, 作3型はヤマアオバであった。作3型収量を基準とした作1型の収量割合はミナミワセの69%が最高で、他品種は58~63%であった。作2型では早生系が90~92%, 晩生系が82~86%であった。

以上の結果から、3月末日まで利用する品種はミナミワセ, 4月末日まで利用する品種はヒタチアオバ, ワセユタカ, 5月末日まで利用する品種は晩生系の全品種が適したが、その中でヤマアオバが最適と思われた。

第2表 作型別2ヶ年平均草丈伸長量と風乾収量

合計草丈量 (cm)	1型	MW極早生	WA (早生)	WY (早生)	HA (晩生)	YA (晩生)	NH (晩生)
		(早生)	(早生)	(早生)	(晩生)	(晩生)	(晩生)
1型	164	180	193	179	181	155	
2型	213	248	269	247	251	217	
3型	257	312	327	322	319	287	
収量 (kg/a)	1型	99	93	93	91	93	95
	2型	133	133	134	135	133	127
	3型	144	146	149	157	160	151